

# 北陸石仏の会々報

第 8 号  
平成6年11月1日発行

編集発行

北陸石仏の会(日本石仏協会北陸支部)

代表 藤村 善雄

富山県砺波市太田一七七〇 尾田武雄方

〒939-13 電話 〇七六三―三二―二七七二

振替 〇〇七四〇―二―一―一九七四

## 朝倉遺跡の石仏 石塔

大久保 まさ子

朝倉氏遺跡は福井市街地より東南に約十km離れた一乗谷地区にあり三方を山に囲まれ、南北に約四kmの谷合の戦国大名、朝倉氏の城下町の跡である。

文明三年(一四七二)朝倉孝景が初代 越前国主となって一乗谷に築し、天正元年(一五七三)朝倉義景が織田信長軍に敗れ総てが灰燼となる迄の五代、百三年間、越前国の政治、軍事そして京より学者、文化人たちが数多く来て地方には珍しく香り高い文化都市となり築えた所である。

戦国大名の朝倉氏は近隣の諸大名とよく戦い、殊に加賀一向一揆との戦いでは数多い戦死者を出した。戦に明け暮れての時代で心の拠りどころとして一向宗以外の各宗派に帰依し周囲に寺院四十余りあり民間の信仰心も厚く武士、町人、農民等も功德を願い供養にと石仏、石塔などの造立が盛んだった。

一乗谷周辺には石仏、石塔など地表に拝せるもの二八二〇余体

とか、内九四〇体に文明、明應、大永、元亀、天正、元禄、享保、寛政、天保、元治の銘が読みとれる。

石仏で最も多いのは右手に錫杖、左に摩尼宝珠を持ち蓮台に立つ延命地藏、子育て地藏、水子地藏などと七〇%もあり殆ど童子、童女の銘がある。上品下生印の阿弥陀如来、千手観音、聖観音、大日如来、釈迦如来、虚空蔵菩薩、如意輪観音、十一面観音、不動明王、善光寺式一光三尊仏、盛源寺に総高、一六八cm、甲冑姿で邪鬼の上に立つ肉厚い浮き彫りの天部像は朝倉遺跡では一体のみと。

石塔の一石五輪塔は高さ五〇cm内外の小型が多く一五〇〇余り、一m以上のものは数十体で宗派を問わず造立した様だ。宝篋印塔、無縫塔、板碑とある。法華宗独特の笠塔婆は高さ六〇cm余、幅十九・五cm、奥行十六・五cm、戒名、宝珠、基部蓮弁に金箔の押されたものが残っている。

朝倉時代には墓石はなく、新仏毎に石仏石塔に命日、戒名を銘して墓標石仏、供養碑とした。像高三〇cm程の小型のが道路脇に、山裾にと造立された。又武家の菩提寺、館跡と思われる山裾、台地、寺院参道にと数多く見受けられ、密教の苦界仏もあれば浄土宗の仏もありその種類も多様である。



石仏彫成の手法には殆んど舟形光背の外型だが小形石仏には山形廂の付いたものもある。

光背、尊像、台石と一石で彫り出し、尊像は半肉の浮き彫り、丸彫り像は数少ない。線彫りもあり多様である。精密な彫り、姿勢、表情、衣紋の流れも美しく、彫技レベルの程が伺える。立像、座像あり、五〇cm〜六〇cm程が最も多い。二m程もの大型な像もある。

数多い石仏、石塔の殆どが全身満足なお姿では拝せない。何所か傷ついておられお痛わしいお姿です。幾星箱の風雪による風化で…。戦国時代の兵馬の蹄にかけられてか…、明治初期の排仏棄積の混乱で乱暴者の試し切りの難にと…。現代ではブルドーザーで土地造成の時…。又盗難のため年々数少くなっていると聞かされた。

未だ山合いのあちこちに落ち葉に埋もれ苔むし、地に眠る数五千体余りとの推定と。

それにしても芸術への基礎意識、数多い秀作の彫技で遺された朝倉文化は現在への残照と文化講座で教えられた。

戦国時代の石仏、石塔がこんなに数多く散在しているのは他地では見られない様です。

小高い所でぼつんと座しての如意輪観音のかすかな微笑に見惚れて時を忘れさせられた時があった。先日何年振りかで当地をおとづれて探したが見当たらない、今一度拝したかった。

(幹事・福井)

## 正保四年、明暦三年の庚申塔

《福井県松岡町湯谷》

滝本靖士

福井県松岡町湯谷に二基の庚申塔がある。『松岡町の石造物』(増永常雄／著 松岡町文化財保護委員会／編 松岡町教育委員会／発行：昭和四十七年)に付記として報告されている。二基共に庚申塔としては年代的に古いものであり、貴重な資料と考えられる。

先日の一乗谷での例会のあと、この松岡町の庚申塔をたずねました。今回、石川・富山の会員の方々に(二)神明宮の庚申を紹介いたしました。

なお、採拓にあたっては金沢の彦坂氏、拓影の解説には砺波の佐伯氏のご指導をいただきました。

### (一) 前山の庚申

湯谷集落の南東の山中に木造の小堂があり、一基の庚申塔を安置している。本体高約五十二cmの角柱型で笏谷石製である。前面を彫りくぼめ、内に尊像を浮き彫りにする。一面二手の青面金剛が一鬼上に立ち、その下に二猿が座している。青面金剛の持物は向かって左手が剣であり、右手が索のようである。

左右側面に次の銘文が刻まれている。



(右側面)

□通十□間甲申之地也  
三十三年當御礼納入

(左側面)

捧酒事山木以酒料  
替事  
干時明曆三丁酉年土肥氏

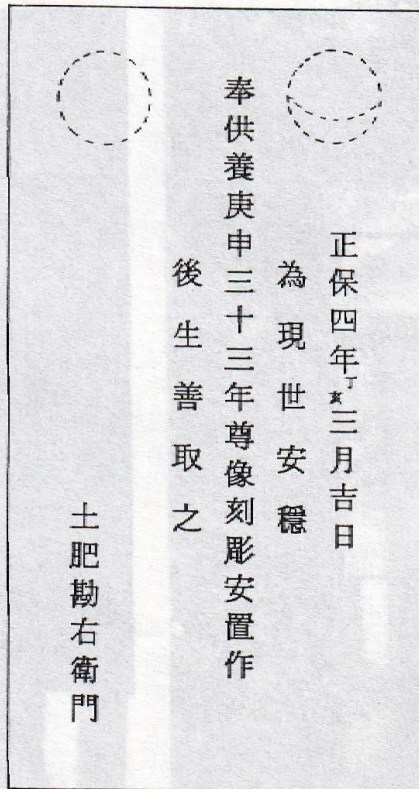
(左側面拓影)



(一) 神明宮の庚申

湯谷集落の東に神明宮があり、本殿の西方に庚申石祠が置かれている。前山の庚申の約二〇〇m北東に位置する。笏谷石製の石祠の扉には日月の窓を配しているが、越前地方では庚申に限らず石祠の扉に日月の窓がみられる。石祠の内部には別石に彫られた尊像を安置するのが一般的であるが、この石祠では奥壁の内面に像が彫られている。この像は三面四手で、持物は向かって左手が

(正面扉)



劍と矛で、左手が輪宝と索である。青面金剛とも三宝荒神とも判断しがたい姿である。正面の扉の上部に「ウーン」の種子が刻まれているが、これは青面金剛にも三宝荒神にも用いられる種子である。脚下に三鬼を踏みつけたその左右に向かい合う2猿を配しており、青面金剛と考えるほうが正解ではないだろうか。正面の扉に左の銘文が刻まれている。

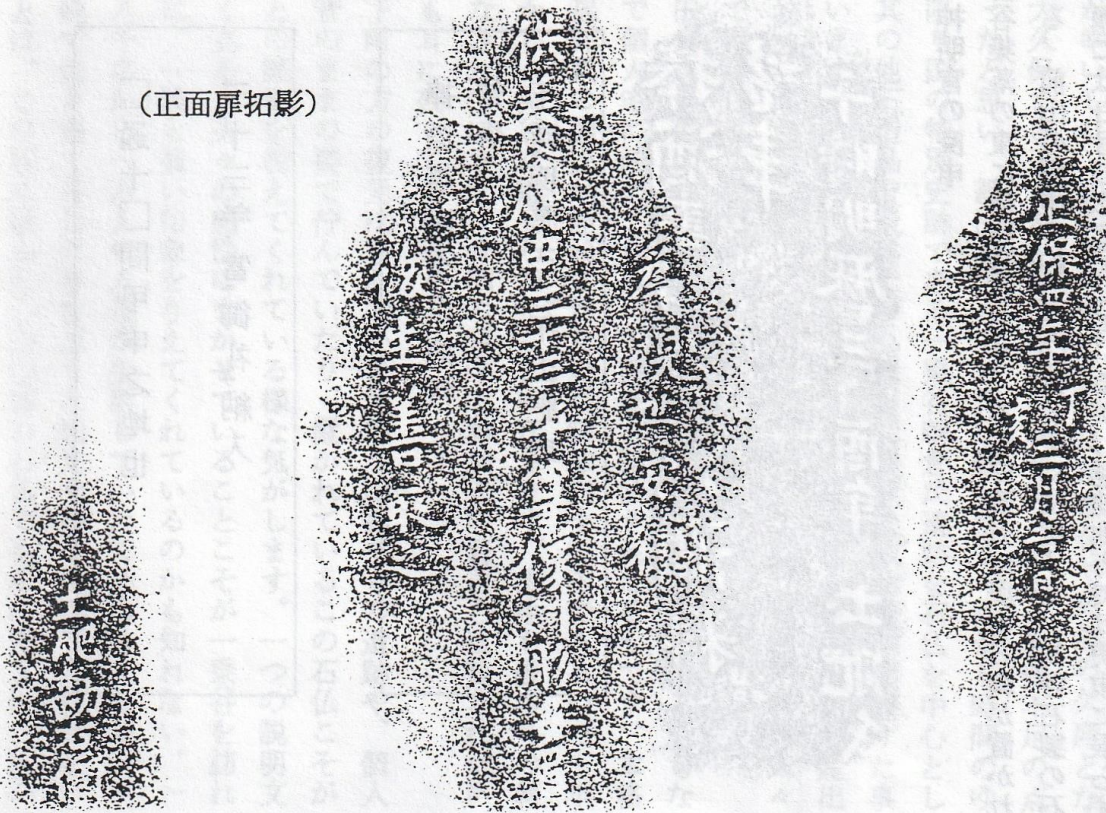
以上、簡単に二基の庚申塔を紹介したが、像容や銘文の内容は特異なものとして注目したい。また二基の庚申塔に刻まれている年号は、(一)前山のもの(明暦三年(一六五七))であり、(二)神明宮のものが正保四年(一六四七)である。

青面金剛の姿が彫られた庚申塔の初出は石川県では宝暦年間であり、富山県では元禄年間である。また全国的にみても私の知る限りでは、庚申塔での青面金剛像の初出は神奈川県寒川町大曲の下大曲神社のもので承応二年(一六五三)であり、(一)前山のものはこの四年後(二)神明宮のものは六年前となる。

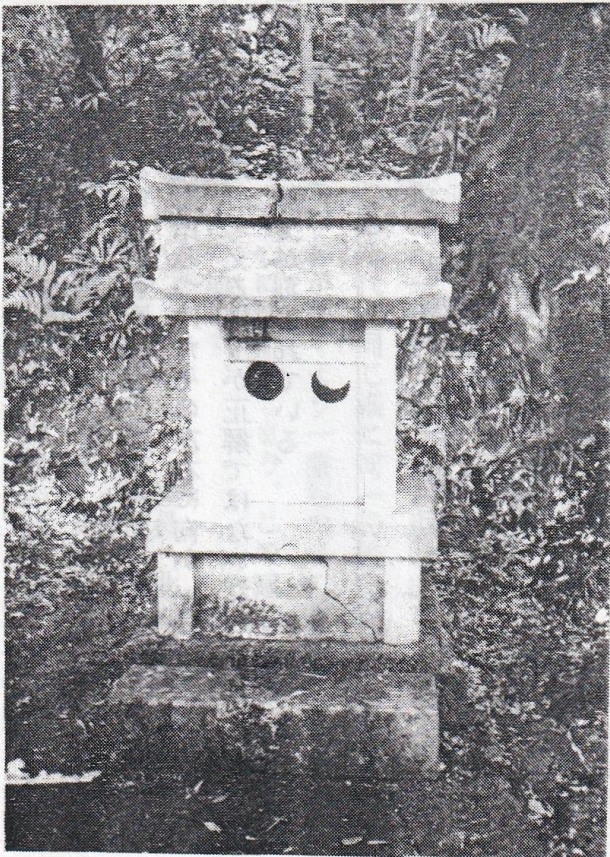


二基の庚申塔は形態・像容ともに大きく異なるが、いずれにしてもこの土地に早くから庚申信仰が伝わったことを示すものである。

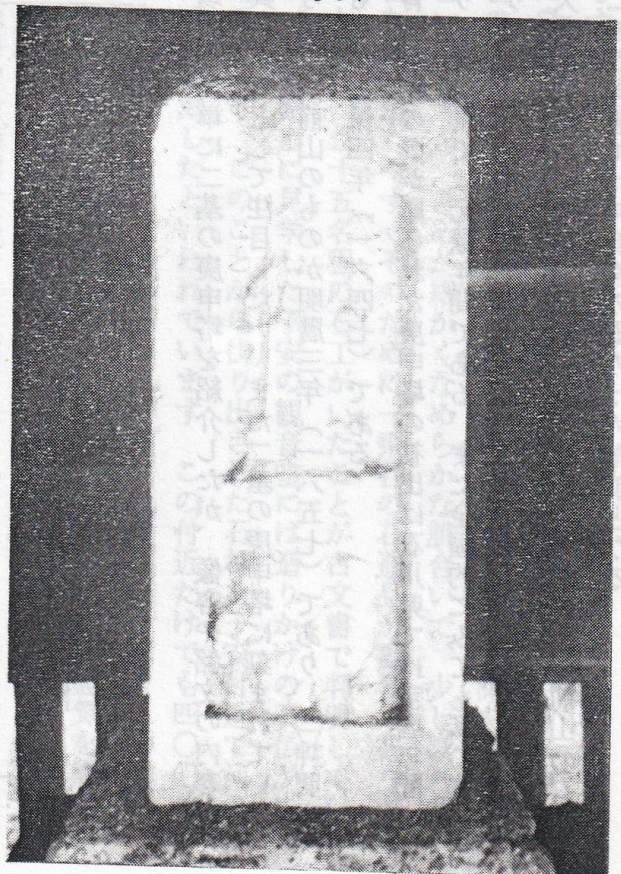
(正面扉拓影)



神明宮の庚申石祠



前山の庚申

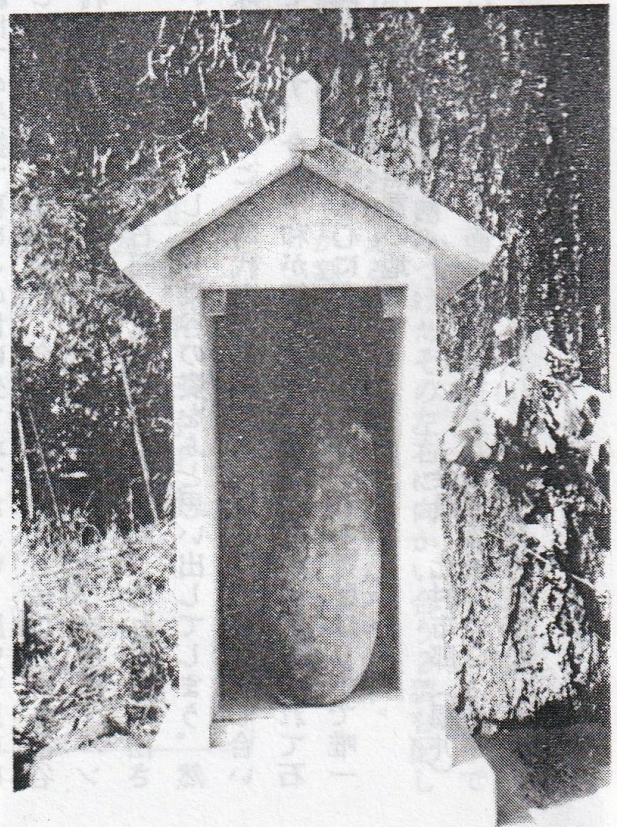




神明宮の庚申石祠 奥壁尊像



平成6年の庚申



〈追記〉

先日の例会の数日後、湯谷に新しい庚申塔が建てられた。花崗岩製の石祠で、長さ約四十cmの石棒を安置しており、右横の石標に「猿田彦大明神 庚申堂」と刻まれている。この石棒は(一)前山の庚申堂再建の折、堂の下から発見されたものである。

また、庚申講に用いられた掛軸を拝見させていただいたが、三幅あり、中央に青面金剛一面四手像、左に青面金剛一面八手像である。いずれも明治時代のものである。

(会員・石川)



庚申



## 北陸石仏の会 第八回例会記録

前日迄の大雨から一転して九月十八日は快晴で研修日和であったのが幸いした。説明役の北野正明氏が都合で突然の欠席となり、大久保まさ子さんとの二人での説明で、何かと準備不足の点があったと思い、紙面を借りてお詫び致します。ただし時間のゆるす限り国の特別史跡である一乗谷朝倉氏遺跡を石仏を中心として、その他石造品や遺跡そのものを、じかに触れていただけた事と思います。古墳時代から伐り出された福井市の足羽山から産出した笏谷石で創られた三〇〇〇体といわれる石造品を会員夫々の目で確認された訳です。

京田良志先生はこの一乗谷に昭和三十四年七月から泊る所なので個人宅に泊めてもらって調査を開始されたそうです。本格的に福井県の調査が開始されたのが昭和四十三年であるので十年前から一乗谷に魅せられたこととなります。先生も数多くの報告をなされています。今回の見学で参加者の驚きと激賞された声は今も耳に残っております。

城下町の方の復元は進んでいます。山裾や寺の遺跡や、個人宅に昔のままの姿で佇んでいたり、置かれているこの石仏こそがほんとの歴史を教えてくれている様な気がします。一つの説明文も無く見る人夫々の感性にまかされていることこそが一乗谷を訪れる人に、一段と強い印象を与えてくれているのかも知れない。一面、八千名から一万人の人達が生活していたであろうこの谷が三日三晩で焼き尽くされた事を思うと観光や飾りたてて人寄せをすることは、この谷に眠る三〇〇〇体の石仏や石塔に刻まれた仏が

ゆるす筈もない。然しこの石仏や、石塔が昭和四十五年の調査の前に自動車で盗人によって多量に運び出されたと、西山光照寺の現在の住職の話であります。笏谷石は燐灰岩で特に青味を帯びて色合いの良さと、きめが細かくなめらかな肌合いで、少し軟石で緻密な彫刻がしやすくそのために一乗谷の石造品が数多く造り出された訳で、二十五名程の石工がいたことが古文書で判明しています。一番始めに見学した子安の観音堂には造りかけの石仏が二体あるという。このことから伐り出された石材を子安付近で河から上げて彫刻したといわれています。この付近だけでも四〇〇体の石造品がありますが幸なことに村の中にあるので無傷で残った様です。このお堂の前にいつも立つと何とも云えない靈氣を感じてしまう。それは信長攻めの前に土中に埋めてかくし、その後村人の総出での発掘で再びこの世に生まれだたという歴史を思いにしてみよう。せいぜいかも知れない。今回の研修では石仏以外にも笏谷石の利用方法が目につかれたと思います。井戸枠、排水路、バンドコ、水槽、ねり鉢、石臼、鬼瓦という具合に、それが造り出されていた平和な繁栄した一乗谷の姿をふと思いで出してしまふ。然し地球上では今もこの時代と同じ様に同一民族が破壊と殺し合いをしています。今の平和が続くよう一乗谷のこの遺跡を訪れて石仏と向い合う時いつも心に念じてしまふ。この遺跡は日本で唯一の戦乱の姿が残る無言の地です。

会員 北村市郎(福井)





第8回北陸石仏の会例会出席者

福井県

大久保まさ子 北村市郎 服部ふじえ

石川県

山田玉枝 永原忠夫 永原聡子 沢村美雪 藤村善雄

福田芳子 福住みつえ 増田信子 毛利直江 山崎顕章

山崎八洲恵 滝本靖士 築山恭子 宮岸久美子 上田信子

白田博以

富山県

加藤永子 大野猪策 前田英雄 前田松代 小竹一夫

林 貞子 新出雅美 斎藤善夫 柳沢栄司 尾田武雄

佐伯安一 猪谷春恵 富田 幸 島倉千春 島倉 巖

島倉初美 田村京子 野上英子 太田幸子 埜村輝子

大浦美子 細野恭孝 南 金三 京田千鳥 中嶋照子

細野きよみ

北陸石仏の会新会員

中嶋照子 島倉初美 林寺殿州

北陸石仏の会 平成六年度総会案内

第八回北陸石仏の会、例会は、総会を兼ねて新潟県中蒲郡村松町で開催されることとなりました。



村松は新潟県内でも古い石仏が数多く残っている地として知られており、また北限の信仰や南限の信仰の地でもあり多種多様な石仏が祀られています。

記年銘のある中世の線刻板碑や地蔵は新潟県内で最古の物であり、また、鮭の遡る小さな川として有名な能代川流域には、特異な形態を残す寒念仏信仰があり、新潟県内の寒念仏塔の中心地域となっている。

村松は三方を山に囲まれた小さな城下町であり、また、軍隊の有った町として知られておりますが、交通の便も悪く、訪れるには誠に不便な地と思われませんが、この機会に一度訪れてみられてはいかがでしょう。村松には用明天皇元年(西暦586)開基という伝承を持つ寺や曹洞宗越後四固道場の一という寺々もある地で、日本で二体などという石仏もごさいます。

十二月ということでお忙しい事と存じますが、この機会に多くの方々から御参加いただきたいと願ひ、ここに御案内申し上げます。

十二月の土、日曜ということで宿の予約に困難を極め、分宿となることもございますので、その節はよろしくお願ひ申し上げます。

一、月 日 平成六年十二月三、四日

一、集合時間 午後一時

一、場 所 村松町ふるさと会館(村松公園内)

電話〇二五〇一五八一五三〇

一、参加費 一万二千円也

宿泊、懇親会、資料代共

参加希望者は次のことをハガキにご記入の上、左

記に申し込んでください。電車利用者には交通案内を致します。不便の為。

一、参加者住所、氏名、電話

一、交通手段(電車、自家用車)

一、申し込み 尾田 武雄 電話 〇七六三—三二—二七七二

尾田 武雄

電話 〇七六三—三二—二七七二

〒959-17 新潟県中蒲郡村松町秋葉町

梅田 始

電話 〇二五〇一五八一三四七五

右記のいずれかにお申し込みください。

一、締め切り 十一月二十日(日)

一、参考 新潟行きのJRに左記のようなものがあります。

北越5号	8:21分	井 沢	福 金	井 沢	新 津
	9:14分	山 津	富 直	山 津	新 津
	9:54分	岡 津	長 新	岡 津	新 津
	11:13分	津 泉	長 新	津 泉	新 津
	12:02分	津 泉	長 新	津 泉	新 津
	12:39分	津 泉	長 新	津 泉	新 津
新津より磐越西線	13:06分	津 泉	新 五	津 泉	新 津
	13:20分	津 泉	新 五	津 泉	新 津
五泉より蒲原鉄道	14:14分	津 泉	新 五	津 泉	新 津

見学地

寺町—線刻五輪塔・中世石仏—中名沢—

寒念仏塔・寒念仏信仰の亀—刈羽—寒念仏塔・他—

下戸倉—古志王堂・寒念仏塔・他—上戸倉—

寒念仏塔・寒念仏信仰の蟹—山谷—寒念仏塔—蛭野

—慈光寺・地蔵・他—新屋—線刻五輪塔・中世石仏—